

『プランB』第24号=2009年12月1日に掲載

高校時代のストライキ仲間

吉岡吉典を偲ぶ

松尾尊兌

Matsuo Takayoshi

吉岡吉典は一九四八年旧制松江高校（島根県）で発生したストライキの仲間でした。彼は理科で私は文科。クラスはちがっていましたがストライキで知りあったのです。このストライキはもちろん共産党が指導したものでしょうが、大変民主的なストで、生徒会で決めたことはスト反対派も守り、デモにも出てくるという有様でした。占領軍の圧迫は当然あり、デモ参加者を軍政部に届けろという命令が高校当局に下されました。県立松江女専との共闘も成立し、その縁でのちに結婚したものもありました。リーダーからのちに大会社の社長や役員、エリート官僚になったものもいます。私は一兵卒でしたが、クラスを越えて友人を得ました。大学に入って上京するときは、この友人たちの家や下宿に泊めてもらいました。

当時一学年二〇〇余人のうち一割は共産党員でした。そのうち私の記憶にある限り八人は大学に進みませんでした。その半数は卒業前に高校をやめて職業革命家となりました。吉岡もその一人です。彼は松江中学のときすでに数学がよく出来るという評判が高かったと中学同級生から聞きました。

一九五〇年の春、私が京大に入り、鹿ガ谷に下宿していたとき、彼は下駄バキでよく泊まりに来ました。滋賀県共産党委員会のウラのリーダーをしていたらしいのですが、あるいは京都のそれも兼ねていたかもしれません。過労がたたって結核になり、大阪の上二病院（共産党系）に一年くらい入院しました。このとき、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの著作をずいぶん読んだと、あとで本人から聞きました。この入院で彼との接触はなくなりました。次に会ったのは一九五五年の六全協後のことです。

退院後、彼は所感派の若手として頭角を現し、六全協前は中国地方委員（県委員長よりも上位）でした。六全協で失脚した彼は平党員として再出発しました。当初松江にいましたが、まもなく鳥取に移りました。ここで結婚したと記憶しますが、この時分は夫人に会った記憶はありません。本人には私が鳥取に帰郷するたびに会っていました。

やがて吉岡はアカハタ記者に抜擢され上京します。彼を引き立てたのは岡正芳氏（当時幹部会委員）だと彼の口から聞いたおぼえがあります。私は上京するとよく電話をかけて代々木の党本部をたずねました。彼の世話で野坂参三氏に会ったことがあります。私はすでに氏の自伝『風雪のあゆみ』（第一巻）の書評を發表していました（『歴史評論』一九七一年七月号）。私は氏の自伝も、その生涯も全否定することはできません。

吉岡のはばひろいジャーナリズムや官界との交遊関係は、このアカハタ時代に築かれたと思います。

私が一九七九年にロンドン大学に遊学していたとき、近所のタイムズ本社内にある朝日新聞支局に行っては日本の新聞を読んでいました。支局長の有馬純達氏を彼が紹介してくれたおかげでした。

こういうひろい人脈が彼の大きな政治的財産でしたが、党内の一部幹部から誤解を招いたようです。

一九八六年に参議院議員になってからも京都に来ると電話をくれて、会っていました。地下時代らしいの京都との縁は続いていたようです。私が編集した小柳津恒（戦後京都共産党の創立メンバー）著『戦時下一教師の獄中記』（一九九一年）を未来社に出版の世話をしてくれ、その出版祝賀会が京都であったときも出席してくれました。

彼は調べることが好きでした。歴史家の素質がありました。郷里の島根県の米騒動（一九一八年）や朝鮮の米騒動を現地の新聞その他を調べて活字に残しました。また「豊原五郎」という戦争前の島根県出身の党員の事蹟を発掘して本にまとめたことがあります（豊原五郎をたてる会編『豊原五郎の手紙』一九六四年）。彼の議会活動の強みは、歴史的事実の調査能力にありました。

今年三月一日にソウルで亡くなったのは死場所を得たといえましょうか。晩年の仕事は近代朝一日関係の研究に注がれました。その研究は韓国でも評価され、昨今のように共産党でも韓国に自由に行けるようになる前から韓国に行っていました。彼と関係のよかった外務省筋の助力があったのかもしれませんが。北京にも日本大使の招きで行ったと話していました。

遺稿「戦後日本と『韓国併合条約』」（『前衛』二〇〇九年一〇月、一一月号）と最後のソウル講演「進歩を目指す歴史の大勢に則った朝鮮人民の運動と、逆らった日本帝国主義」（『AALA』1号）は、ともに立派な歴史論文です。これらは近く一冊の本の中に収められると聞いています。

晩年の彼の史論の特徴は、第一次世界大戦後を「戦争の違法化」の時代と位置づけたことにあります。これは「帝国主義体制の再編成、むしろ新しい段階に応じた最強化」（江口朴郎）の時代とみるかつてのマルクス主義史学主流の見解とは明らかに異なったものでした。彼が新原昭治氏との共編で『資料集 20世紀の戦争と平和』の六冊を出版したとき、田畑茂二郎らの国際法研究を勉強した結果として得た見地でしょう。彼は、反動視されていた最高裁長官横田喜三郎の国際法研究を高く評価していた記憶があります。ベルリンの壁の崩壊に始まる世界史の転換を感じとったことによるものかと、想像しています。

二月下旬に電話がかかってきたのが言葉を交わした最後でしたが、そのときもアメリカと三・一運動との関係が知りたいということで、長田彰文氏の著書を紹介しました。三・一の集会のためソウルに行くというので、私のソウル行き（韓国東北亜研究財団主催の「世界史における一九一九年の意義」国際講演会）が、他のアメリカ人講師の都合で三月九日に変更されたことを告げ、ソウルで会えぬのは残念だと言ったことでした。

京都に来るごとに電話をくれて、短時間でも会っていてくれていた彼の声は、いつまでも忘れることはできません。

（まつお・たかよし／京都大学名誉教授）